

人生と日本を語る ノーベル賞作家 大江健三郎



大江 健三郎(おおえ けんざぶろう、1935年1月31日 -)は、日本の小説家。愛媛県喜多郡内子町(旧大瀬村)出身。東京大学文学部フランス文学科卒。1994年、日本文学 史上において2人目のノーベル文学賞受賞者となった。

自分は小説家であるがエッセイ、ルポルタージュも手掛けている。
小説は人間らしさの表現を中心に書いている。

すぐれた言葉、優れた人物はどんなバックグラウンドで活動したのかが興味がわき、それらを調べて書いたのが2012/07/06『定義集』(朝日新聞出版)。

36歳の時、広島原爆病院(日赤病院)の院長・重藤先生に2日間お話を聞きしその内容をカードに整理し、その対話『原爆後の人間』刊行。

沖縄はいまだ占領下状態。沖縄の人々の話を聴いている。
いま、ルポルタージュの柱は2本。ひとつは広島原爆。もう一つは沖縄。

外国の出版社が注目してくれて外国の色々な作家と会うことが出来た。
ハーバード大学からは名誉博士号をいただいた。

同じ年のエドワード サイドは影響を受けた。彼はパレスチナ問題、文化論などを書いている。白血病だった。
人間のやることだから...一つの国土に二つの民族パレスチナ人とイスラエル人は共存できる。彼は楽観主義のひとだった。

チェコのミラーヘンダルは尊敬する友人。彼はいつも「次の時代の人々が生き残れるようにすることが一番大切」と言っている。

星の王子さまは一稿から三稿までであるが三稿が大切。形容詞が違う。
「見えてないものが大切。それが本質。それは心」大切なものは見えないのです。

国学者の大野 晋(おおの すずむ)は日本語字引の中で、日本で古くから一番使われている言葉は「あわれ」と言っている。

この言葉は相手が生きている状態で、同じ状態にいる人に対し使う感情の言葉。
相手が消えてしまったり、死んでしまったときは「悲し」になる。



2006年4月から2012年の3月まで、月に1回朝日新聞朝刊に連載されたエッセイをまとめたもの。

多くの名著が紹介されている。古今東西、実に多くの作家、文化人、名著が次々と登場してくる。
シモーヌ・ヴェイユ、フィリパ・ピアスフラナリー・オコナー オルハン・パムク チェーザレ・パヴェーゼ テツオ・ナジタ 渡辺一夫 南原繁 山内久明 鶴見和子 安藤昌益 広島、長崎での被爆体験を文学にした竹西寛子 原民喜 林京子etc

広島ノート

核がどれだけ恐ろしいものは、チェルノブイリでばらまかれた放射性物質がまだに広大な地域を汚染したままで、現在も住人の健康を害したり、奇形の子供たちを増やし続けたりしていることだけを見ても明らかですが、核の恐怖の原点にあるのはやはり日本への原爆投下だと思います。50年も経ってしまうと、原爆がこの国へ投下され、一瞬に何万人もの人が死んでしまうというような恐ろしいことが本当にあったのだろうかという感じさえますが、僕はこの本を読むことにより、それが現実にあったことで、核の問題はけっして過去に解決済みのことではなく、現在と未来に影響する重大な問題であるという認識を新たにしました。
本書は、1963年と1964年の原爆禁止世界大会のルポと、大江健三郎が見聞した原爆にまつわるエピソード、原爆症と闘う人々の描写などからなるノンフィクション。
沖縄ノートもそうですが、一見古いようにして実は現在においてもその価値は目減りするどころか、むしろいっそう重みを増している、そんな作品だと言えるでしょう。
1965年発行。(岩波新書、580円)

沖縄ノート

佐藤栄作氏が首相で、沖縄がまだ日本に復帰していないころに書かれた沖縄問題を考察する評論集。沖縄の歴史上の人物や現代の沖縄の活動家の軌跡を通して、沖縄を差別し続けてきた日本と日本人を糾弾します。その刃は当然彼自身へも向けられ「このような日本人ではないところの日本人へと自分をかえることはできないか」という真摯な自問自答が繰り返されています。

これを読みながら何度も、これが今年書かれたばかりの文章のような気がしたものです。この本でも主張されているとおり、沖縄問題は沖縄の復帰で解決したのではなく、ほとんど当時のままの状態でもいまなおあり続けているのだということなのでしょう。この本では前沖縄知事の大田氏や社会党の衆議院議員上原氏も登場します。1970年の作品。(岩波新書)